

なんじゃもんじゃの木き
ゆきおんなでんせつ
雪女伝説



登場人物

ナレーター

旅人たびびと

雪女ゆきおんな

村人1むらびと

村人2むらびと



1



2



3



4



5



6



7



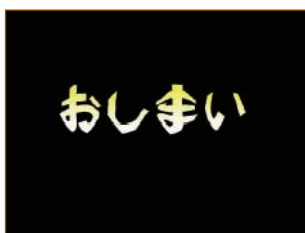
8



9



10



11



本郷と杉久保の境にある道と八王子に行く道の交わったあたりに、
太い大きな木があります。木の高さは、二十メートル。木のまわり
は約七メートルもあり「なんじゃもんじゃの木」と呼ばれています。
その大木にはこんなお話しが語りつがれています。



旅人

その日は、朝からどんよりとしていましたが、夕方から雪が
降り始め、夜半にもなると吹雪になりました。ヒューヒューと風も鋭
くなり時間を追うごとに一層激しさを増していました。
一人の旅人は、雪があまりに激しいので、なんじゃもんじゃの木で
一夜を明かすことにしました。そして、木の洞に入ると荷物を下ろ
し焚き火をはじめました。

「やれやれ、えれえ吹雪になったもんだ。座間で宿をとるつもりだ
つたんだが、まあ仕方ねえなあ。」

旅人

この旅人は八王子の生糸商人でしばしばこの道を歩いていたのです。
「藤沢を立った時はたいしたことなかったのに用田までなんと
かきたときにやあ結構な積もりになっていたなあ。」



旅人



雪女

旅人は、荷物から毛皮の胴着を出して羽織るとすっかりびしょぬれになったわらじと足袋を焚き火で乾かし始めました。

そして荷物から鍋を取り出し雪を入れてお湯を沸かそうとしました。その時、急に背中に人の気配を感じました。なにげなく顔を上げてみると、白い着物を着た若い女の人が立っていました。旅人を見る眼はぞっとするほど恐ろしかったのですが、姿はなんとも美しかったです。

「あまりの雪に行き場を見失いました。大変申し訳ありませんが私もここで夜を明かしたいのですが。」
と言いました。

「いいですよ。ひどい吹雪ですからね。ここへおすわりなさい。」
旅人はとまどいながらも座れるように薪の束を置いてやりました。女の人はにっこり笑って、かぶっていた白い大きな布をとりました。その人の肌は透けるように白く、髪は足元まで届くような黒髪でした。女の人はつつましく腰を下ろしました。

その瞬間、氷の洞穴にいるような寒さが旅人の身体を包みました。



旅人

ぞくつとした身体を温めようとお湯を沸かすのをやめて、焚き火のふところをつつついて炎をかきたてていますと、女の人が腰をずらして身を寄せて来ました。すると先ほどにもまして寒さが一段と強くなり旅人の手も足もブルブルと震えてきました。

「おお冷える。凍えるような寒さだ。」

旅人はそう呟きながら急いで薪を何本もくべようと思いました。

雪女

「そんなにお焚きにならなくてもいいでしょう。」

そう言つて薪を掴んでいた旅人の両手をスツと抑えました。なんと女の人の手は氷のように冷たかったです。旅人は一瞬自分の体温が吸い取られるように感じたので、女の手をどかせ離れるようにしました。すると女の人はまたも近づこうとするのです。旅人はまたもや離れました。こんなことを繰り返しているうちに二人は焚き火のまわりをグルグル何回もまわってしまいました。旅人はすでにこの女の正体を感じていたので。

旅人

「これが話しにきく雪女か。とんでもないことになった。」

それから旅人は、絶えず新しい薪をくべて火が消えないようにし



旅人

「早く夜があけないものか。仏様どうぞお守り下さい。」
と必死に念じていました。

どのくらい時が過ぎたでしょう。女の人はずっと立って出て行きました。

振り返りざまに旅人を見ましたが、その目は身もすくむような、なんと恐ろしい輝きでした。

しばらくして、旅人は木のほらあなから外に出ました。吹雪はいつの間にか止んで、かなた吉岡の空はすっかり明るくなっていました。旅人は生き返ったような気持ちで深く息をしました。それから自分の足元あたりをふと見ましたが、今しがた出て行った女の人の足跡はどこにもなかったのです。

旅人は間もなく八王子に着きましたが、その宿で高熱を出して、しばらく動くことは出来ませんでした。周りの人たちは、

「そりや雪女にまちげえねえ。」

村人 1
村人 2
「よく無事でいられたもんだあ。」

村人 1, 2
「ほんとだ、ほんとだ。」



と口々にいいました。

ところでこの「なんじやもんじやの木」は、なんでこんな名前がついたのでしょうか。正式には、「ハルニレ」と言いますが、今から約三百七十年ほど昔の寛永九年（一六三二年）徳川三代将軍家光の頃、京都の御殿医だった半井ろあんという人がいました。ろあんは将軍の病をいくつも治した功績により当時の本郷村のこの地に千石を頂き、屋敷を構えました。そしてろあんは朝鮮に渡った時、持ち帰った木を屋敷の入口に植えました。大変珍しい木でその名前を知っている者がなく、誰言うともなく「なんじやもんじやの木」と呼ばれるようになったそうです。この大木は、現在では、神奈川県天然記念物で名木百選にもなっています。